

令和6年度 京都府立大学 一般選抜試験（前期日程）
入学者選抜学力検査「国 語」

○解答例

一

問一

- ① 弄 ② 窮 ③ かん ④ むさぼ（る） ⑤ ひた（されて）
⑥ 端 ⑦ わざわ（い） ⑧ 顧

問二

未来において何かの役にたつと思うから読書をする人（24字）

問三

読んだ本の大部分が読まないのとまったくおなじ結果になっている（こと）

問四

本は表紙から裏表紙まで読むものという考えから、本に「冊」という単位はなく、読みうるものは時間の経過の中で編み上げられてゆくテキストであるという考えに変化した。

問五

筆者は、読書とはさまざまな異質な過去を現在読んでいるテキストを通過して未来に役立つものとするという循環的な行為であって、人々が読みうるものは物質的に完結しているかに見える本ではなくテキストだけであり、そのテキストにより、読者がどのように変化する、どのように生きてゆくかということを重要だと考えているから。（151字）

二

問一

- ア 表現できない イ ぐっしょりと濡れている ウ かわいそうに
エ かわいらしい オ いい加減に愛する

問二

B・下二段活用

問三

少将の君の、落窪の君に対する、自分が落窪の君の恋愛対象にふさわしい男性ではないと、謙遜する趣旨の発言。

問四

- (1) 「憂きには鳥」の「憂きには」と「には鳥(鶏)」、「なく」の「鳴く」と「泣く」。
- (2) あなたの愛情がつらいときには、私は我が身を鳴く鶏に似せながら、泣く以外の声は聞かせることはしまい。

問五

①

三

問一

- ①なんぞ ②かな ③ともに ④すなわち ⑤しかり(と)

問二

書生以外に託すべき者はいない。

問三

一人の真の書生がここにいながら、人が自分をそしるのを恐れて、書生とみなされるのを避けるだろうか。

問四

いよいよそのせつをあらわし

問五

自分は書生ではないとして俗吏のまねごとをするものの、俗吏にもなりきれず、弁解に終始するどっちつかずの人間になること。

問六

部下を世間知らずの書生だとして嫌った高官に対し、自らも書生であると称してたしなめた乾隆帝のすぐれた言葉を、友人へのはなむけをした古人に倣って、役人となるため旅立つ夏進士に贈ること。